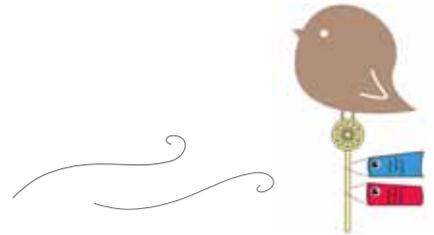


ボランティア養成講座から報告



## 新たなメンバーを迎えて

桜の季節も過ぎ、あっという間に新年度です。京都自死・自殺相談センターでも第二期電話相談ボランティアの認定式が去る4月19日に開催されました。

今年度、第二期電話相談ボランティアとして認定されたのは2名。今後、第一期生の12名と合わせて14名が電話相談ボランティアとして活動することになりました。

第二期養成講座は昨年5月から始まり、前期の講座では当センターの趣旨を共有するために二期生全員が体験型のロールプレイを中心とした研修を行いました。

今回認定された電話相談ボランティアは前期の研修後、8月からの後期研修である電話相談実習を重ねるとともに、一期生、二期生の枠を超えたグループ研修で電話相談ボランティアとしての研鑽を積んできました。

そして、今年度も5月から第三期相談ボランティア養成講座を開催いたします。今年度は16名の受講申込がありました。来年の今頃も、またこうして新たな仲間の参加を報告できることができよう、私たちはこれからも着実に歩みを進めていきたいと思っています。

(相談活動委員長 廣谷ゆみ子)

## 「受け取る」

当センターを設立して3度目の春を迎えました。最初10名だった仲間も、今では43名になっています。機会がある毎に、それぞれの想いや考えを語り合い、よりよい活動を模索しているみんなの姿を見ながら、いつもとても心づよく感じています。活動については、まだまだこれからです。それでも、経験を通じて研磨されることで、最も大切にしたい、根っこにある自分たちの姿勢が明確になってきたように思います。このことは、言葉使いの変化からも感じ取れます。

たとえば、〈苦悩を抱えた方の気持ちをどのような姿勢で聴くのか〉ということを実践する際に、以前は気持ちを「受け止める」と表現していたことが、いつからか気持ちを「受け取る」という表現に変化してきました。気持ちを「受け止める」のか「受け取る」のか、表現の違いによって聴く姿勢のイメージが異なります。それは〈投げられたボールをキャッチャーがバシッと受け止める〉のと〈贈り物を受け取る〉というような違いです。話を聴く時に、この違いはとても大切だと思います。苦悩を抱えた方の大切な気持ちが私の方にそっと差し出され、それをけっしてこぼさないように大切に「受け取る」、そんなイメージが私たちの聴く姿勢によく一致しているように感じます。

活動における姿勢がブレないように、言葉ひとつひとつを大切にするとともに、その言葉の意味を仲間同士で丁寧に共有していきたいと思っています。  
(代表 竹本了悟)



Sotto レビュー 鷺田清一著 (角川学芸出版)

## 『「ぐずぐず」の理由』

「この感情は、どんな言葉で表現するのが適切なのだろうか」。本書は、こんな「もやもや」を「すとな」と楽にしてくれたような一冊である。「言葉が滑らかにすらすら出なくとも、いまはいいじゃないか」、そんな思いになれたからである。

著者は、これまでに「聴く」「待つ」といった日常的な行為を沈思してきた鷺田清一氏。その中でも本書は、いわゆる臨床哲学を開拓してきた氏が、言葉の深みを探求していく哲学書である。主たる考察は、オノマトペ（擬態語）の意味や生成を細解くことにある。読後感も、言葉と気持ちの縫い具合を確かめられたことに収斂する。人は言葉にしにくいような深い感情に支配された時、既存の語彙でしっくりこない、その感情の有り様を表現する言葉を探して、あれやこれやと言葉を紡ぎだしてきたのだろうか。

本書は、無限にひろがるオノマトペの意味を探るのみならず、言葉の本質を探る旅へと誘う。ありふれた言葉であっても、その意味の豊潤さを確認させられ、ひとつの言葉をとおして果てなく広がる地平の彼方を垣間見たような気にさせられた。人は、言葉を「話す」「聞く」「語る」「語りかけられる」「放つ」「拾う」「受け取る」「待つ」。ここにいう言葉とは「声」「響き」「文字」。人間は言葉を求め、求められる。

人間の、人間としての基礎にかかわることがらはすぐに答えの出ぬものが多い。…中略…ここでは、すかっと噛みきれぬ論理より、いつまでも噛み切れない論理のほうが、重い。…中略…ぐずぐずしながらも、逡巡の果てにやがてある決断にたどり着く、いやたどり着くことをいやでも強いられる。その時間を削ぐことだけはしてはならないとおもう。その時間こそ人生そのものなのだろうから。

「ぐずぐずしないで、はやくしなさい」と睨られたせいで、つねに結論を急いでいたが、この言葉に出あったことで、「もう少しゆっくり考えてもいいんだな」という気持ちになれた。何度も読みかえしながら、じつくりと噛み歩いていきたい一冊である。  
(T.Y.)

# 大切なのは、 気持ち。

仮設住宅訪問活動の現場から  
被災地ノート ⑦

「孤独」「ひとりぼっち」と聞いて、どのような人を想像するだろうか？楽しげに話す集団の中に入れずにいる人を思い浮かべるだろうか？それとも、部屋の中で一人で過ごす人のことを思い浮かべるだろうか？

居室訪問活動を続けていると、訪ねたお部屋に、必ずしも、お一人でいらっしゃるとは限らない。お子さんに囲まれて、あるいは、ご夫婦でいらっしゃることもある。

小さな子供さんが、「わたしのお爺ちゃんね…。」と言いかけて、母親が制止する場面や、お部屋にいらっしゃるご家族を気にされて、震災の話に触れないようにお話される場面にも出会ってきた。

あるご婦人は、夫の前では妻を演じ、子どもの前では母親を演じ、自分の気持ちを見つめるゆとりも、弱音を吐く場所もなかったということをつげられていた。辛い思い出が蘇っても、子どもの前では、自分でも驚くほど毅然とした態度が取れてしまうようだ。「家族の前では、悲しんでいられない」あるいは、「みんな頑張ってるんだから、泣き言は言えない」そういう思いが、自分の気持ちを抑えてしまうようだ。

そういう、自分で自分の気持ちにフタをしてしまって、気持ちのやり場に困っているようにも感じられた。

家族に囲まれ、あるいは楽しげな会話を楽しむ集団の中にも、こうした自分の気持ちにフタをしてしまっている例は、多く見られる。孤独やひとりぼっちは、決して、一人であることのみを意味しない。

気持ちを分かち合える場所、共有できる場所がなければ、どれだけ多くの人に囲まれていても、その人は、「孤独」「ひとりぼっち」であると言えるだろう。

安心して気持ちを吐き出してもらえるような場所、弱音を吐いてもいい場所、その人の悲しみが、その人の悲しみのままで受け止めてもらえる場所、そういう場所を私たちは、少しでも提供したいと思う。

そして、そういう活動が、「泣き言は言ってもいいんだ」「弱音は吐いてもいいんだ」という意識として、認知され、広がってくれればと思う。

(ボランティア 2 期生 A.C.)

## 活動報告

- 電話相談件数…106件（4月期）
- 相談活動委員会  
グループ研修 4月19日（水）15名
- グリーンサポート委員会  
語りあう会 4月12日（木）8名
- 啓発活動委員会  
啓発活動委員会会議 4月2日（月）参加者6名  
街頭活動 4月13日（金）参加者6名

## 今月のことば

永遠なんていらぬよ  
僕が欲しいのは今

甲本ヒロト（THE BLUE HERTS「ほんの少しだけ」）

## 寄付ご協力一覧（敬称略・順不同）2012年4月14日～4月30日

ご協力にこころより感謝いたします

浄土真宗本願寺派 株式会社エクザム 郡上市・浄國寺（藤井好正） 広島市・浄賢寺（諏訪了我） 山口県熊毛郡・正信寺（南昌宏） 下関市・光明寺（泉哲朗） みやま市・浄弘寺（下川弘暎） 北海道空知郡・間信寺（門上誓明） 北海道樺戸郡・西光寺（西野和夫） 須坂市・東照寺 津市・妙華寺（中川和則） 北九州市・西法寺（西村達也） 鹿児島市・明樂寺（高木壽章） 長門市・法林寺（蘭純精） 大阪市・誓源寺（旭隆昭） 大阪市・栄照寺 竹田市・安照寺（衛藤徹三） 八尾市・光専寺（鶯地真） 国東市・教善寺（溝部教生） 長崎県南松浦郡・得雄寺 上越市・真行寺	塚本一真 三浦真証 神崎裕子 山本清子 中田清吉 岡京子 石見由嘉 後藤壽邦 山口俊雄 戸沢葉子 高山幸博 原智精 安本義正 百濟小雪 桜井清紀 玉田義幸 安田智誠 那須英勝 佐々木大悟 池田行信	日野凡記 磯山靈秀 廣瀬良子 緒方正弘 中村芳道 根市・専宗寺 一関市・正光寺 堺市・圓光寺 宇野全智 下関市・専福寺 本山栄二 川上順明 葛野洋明	神戸市・光瑞寺 牧田宏 広島市・正伝寺 四日市市・浄恩寺 豊橋市・勸正幸 大津市・徳浄寺 今泉潤 奈良県吉野郡・願行寺 禿定心 大田市・安養寺 塩月光夫 熊谷光世 福井県吉田郡・本覚寺
---	---	--	--

### ●支援方法

賛助会員 年間1口3,000円  
寄付 金額は問いません  
法人会員 年間1口10,000円

### ●会費・寄付金振り込み先

郵貯間 ゆうちょ銀行[振替口座] 00950-0-271875  
他行間 ゆうちょ銀行[当座] <sup>ゼロバンク</sup>〇九九店 0271875

### ●現物によるご寄付も助かります

(例) えんぴつ、模造紙、付箋、ホワイトボードマーカー 等

### Sotto コメント

緑の美しい季節です。ビルの間からみえる山々の若葉は萌黄色に芽吹き、深緑とのグラデーションがなんとも言えず美しい。風も爽やか、五月晴れ。この心地良さをしみじみと味わえるのも、冬の寒さを知っているからなのでしょう。

(N.Y.)

### 発行 2012年5月

特定非営利活動法人 京都自死・自殺相談センター事務局  
〒600-8349 京都市下京区西中筋通花屋町下ル堺町 92  
TEL 075-365-1600  
URL <http://www.kyoto-jsc.jp>  
E-mail [so-dan@kyoto-jsc.jp](mailto:so-dan@kyoto-jsc.jp)